

アンドレ・シェニエとイギリス

永田, 英一

<https://doi.org/10.15017/2332886>

出版情報 : 文学研究. 52, pp. 1-18, 1955-06-20. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



アンドレ・シェニエとイギリス

永田英一

アンドレ・シェニエ¹⁾は一七八七年十二月から一七九〇年五月まで、約二ヶ年半²⁾(二十五―二十七歳)、フランス大使館の一員としてロンドンに滞在した。そしてこの滞在はかれの短い生涯の中の貴重な部分であるが、詩人としては生活的にも精神的にも「死をのぞむ」ほどの苦しい試練であり、またこの間に勃発したフランス大革命のために、かなり特殊な意味をもっている。——われわれはこのロンドン滞在中の詩人の生活状態をかれの遺した乏しい文章をたよりに報告し、そして可能ならば、この期の経験によつてシェニエとイギリスとの間に生じた何らかの関係を指摘したいと思う。

1) André-Marie Chénier (1762-1794)

2) シェニエのロンドン滞在の期間については、このほかに異説があるが、それはシェニエが決定的にロンドンを去つてパリに居住した時期をどこに劃するかに因つて異なる。あるものはこの時期を一七九〇年夏とし、またある

ものは一七九一年の半ばとしている。そしてこれらの説は「休暇」*Congé* という語にあまりに拘泥してゐるように思われる。たとえば父ルイ・シェニエ (Louis Chénier) がパリからイール・ド・フランスにいた娘のラ・ツール・サン・ティジェスト夫人 (Mme de la Tour Saint-Jest) に送つた一七九一年一月二十一日付の手紙の中の「あなたはいないが、わたし達はみんなここに集つた。サン・タンドレ (Saint-André) —— アンドレの愛称) も休暇で……」という文言も一つの証拠とされてゐる。けれども、シェニエは一七九一年九月大使が死ぬまで名目上は秘書の地位にあつたのであつて、「休暇」というのも後にはそれ以上の意味はなかつたと考えられる。いづれにしても「在イギリス」のシェニエは一七九〇年春頃からしばしばパリにあつて「一七八九年協会」に出入りし、同年八月二十四日パシで草した「フランス人民に告ぐ」によつて革命ジャーナリズムの渦中に身

を投じているので、われ／＼としては諸種の事情を勘案して、実際のロンドン滞在期間を一七九〇年五月で打ち切った方が妥当であると思う。

*

アンドレ・シェニエは一七八三年春、病氣その他の理由で軍職を断念して、当時ストラスブルに駐屯していたアングレームの歩兵聯隊からバリへ帰つて以来、親友トリュデーヌ兄弟(Les Trudaine)とスイス、イタリーへ旅行したり、諸方のサロン、ことにアルバニー伯爵夫人のサロンに出入りしたり、また自由な研究や詩作にふけて、生涯中もつとも甘美な年々をすごしていた。けれども父はすでに年老いて(二七五)一七八四年以来モロッコ総領事の職を辞して年金生活をしていたし、他の兄弟達もそれ／＼一定の職についていたので、かれとしてもさういつまでも「悠々とミューズ、快樂、勉強や平和を味わつて」ばかりいられたかつた。シェニエは、富裕な友人達と違つて、自分の生計を立て、老父の負担を軽くするために何かの職につかなければならなかつた。そして一七八七年秋、友人ド・パンジュ(Fr. de Pange)のあつせんで駐英大使ラ・リュセルヌ子爵(Le vicomte de la Luzerne)に紹介され、この人の下で働くことになつたが、かれの身分は大使の私設秘書、いわば大使個人の使用人であつて、正式のフランス大使館員ではなかつた。

- 1) la comtesse d'Albany — イタリーの詩人アルフォ
ヤリ (Alfieri) の夫人。前夫の名から当時もこう呼ばれ

ていた。

- 2) シェニエの身分は従来書記官(Secrétaire)または随員(Attaché)とされてゐたが、正確には私設秘書(Secrétaire privé)といふべきだ。

アンドレ・シェニエは一七八七年十二月はじめ、明らかに絶望と忍従の思いでバリを出発し、同六日カレーからドウヴァーへ渡つた。しかもこの船旅はきわめて苦しいものであつた。われ／＼はその模様を「六日、ドウヴァーへゆく途中、船中にて、臥して、苦しみながら半ば作る。一七八七年十二月十四日稿、ロンドンにて」と附記されたつぎの断片にみるごとくである。

Ainsi, lorsque souvent le gouvernail agile
De Douvre ou de Tanger fend la route mobile,
Au fond du noir vaisseau sur la vague roulant
Le passager languit, malade et chancelant.
Son regard obscurci meurt. Sa tête pesante
Tourne comme le vent qui souffre la tourmente;
Et son coeur nage et flotte en son sein agité,
Comme de bonds en bonds le navire emporté,
Il croit sentir sous lui fuir la planche légère.
Triste et pâle, il se couche; et la nausée amère
Soulève sa poitrine; et sa bouche à longs flots
Inonde les tapis destinés au repos.
Il verrait sans chagrin la mort et le naufrage.

Stupide, il a perdu sa force et son courage.
Il ne retrouve plus ses membres engourdis.
Il ne peut secourir son ami ni son fils,
Ni soutenir son père; et sa main faible et lente
Ne peut serrer la main de sa femme expirante.

(大意。——こうして、すばやい舵がドウヴァーやタンジエの航路を切つて進むとき、波上をすべる黒い船の底で、客は衰え、よるめき、ぐつたりする。かすんだ眼は死にそ、うだ。重い頭は嵐吹く風のようにまわる。そして心臓は、跳ねながら運ばれる船のように、胸の中を浮遊する。軽い板子は逃げそうだ。悲しく蒼ざめて、客は身をふせる。するとにがい嘔氣が胸をつきあげ、どつと吐いて憩いの絨氈をみたす。死も難破も苦にならぬ。茫然と、客は力と勇氣を失い、麻痺した四肢はもう無きにひとしい。友を助け子を救い、父を支える術もなく、弱い手は瀕死の妻の手をとる力もなう。)

こうしてシェニエの生活の場は一転してロンドンに移された。そしてかれはここで与えられた職務をとり、独立の生活に入つたのであつたが、大使館におけるかれの仕事や収入などについてはほとんどまったく知るすべがない。ただここには有能な全權公使のバルテルミー氏 (M. de Barthélemy) や一等書記官のアラゴン氏 (M. Aragon) がいて、かれには別に大した仕事もなく、潔癖なシェニエは「何もしないで」俸給を貰うわけにいかないとい

つて大使を困らせたことや、また囂揚な大使は相当額を給与したといわれる一方、時には借金をしなければならなかつたことなどが知られる位で、われ／＼はこの方面についてはこれ以上記すことができない。

とにかく、シェニエはあの革命前の華やかなパリから霧深いこの都に投げこまれたのであつた。けれどもかれはロンドンに赴任した当座は、ここでの生活にかなり満足していたように思われる。というのは弟マリ・ジョゼフ (Marie-Joseph) がパリからかれに書き送つた一七八八年二月十三日付の手紙の中にこういう文言がみられる。(この手紙は同月四日付のかれの手紙にたいする返信であるが、アンドレのものは残っていない。)

「あなたはロンドンが気に入っていますね。ぼくはそれを期待していました。ぼくも、パリでまたあなたにお目にかかる前に、いつかその美しい都であなたを抱擁しに出かけたいものです。……」

またこの頃シェニエはイギリスの文物にたいしても、そう批判的でなく、むしろ賞讃の傾向にあつたと思われる。たとえば、シェイクスピアについて同じジョゼフの手紙の中にこういう文句がある。

「あなたはシェイクスピアにたいして寛大なようです。あなたはシェイクスピアにはすばらしい場面があると思つていますが、正直なところ、シェイクスピアのすべてのドラ

マの中で、ぼくの考えによれば、少くとも完全にその名に値するものはただ一つしかありません。それは臨終のヘンリー四世とその息子、プリンス・オブ・ウェールズとの対話です。……」

もつとも、この場合、ドラマの評価については、ジョゼフ自身が当時新進気鋭の劇作家であつたことを考慮に入れなければならぬ。ジョゼフはこの時も自作の悲劇「ブルツとカシウス」*Brutus et Cassius* を印刷中で、この手紙の中でもシェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」にふれて、「フィリップ戦争前の、ブルツとカシウスとの有名な場面も、ぼくの考えによれば、非常に出来ないものだ」といつている。——いづれにしても、シェニエがロンドン滞在の当初、かなり満足した状態にあつたことは察せられる。

けれども、こうした状態はながく続かなかつた。やがて異国の魅力もうすれ、好奇と感動の時期がすぎると、シェニエは自分のおかれた現実を正視しなければならなかつた。そしてその現実はその慈愛と友情にとりかこまれたバリ生活とは打つて変つた、孤独と絶望のいわば流謫の境涯であつた。

Sans parents, sans amis, et sans concitoyens,
Oublié sur la terre, et loin de tous les miens,
Par les vagues jeté sur cette île farouche,
Le doux nom de la France est souvent sur ma

bouche.

Auprès d'un noir foyer, seul, je me plains du sort,
Je compte les moments, je souhaite la mort.

Et pas un seul ami dont la voix m'encourage;
Qui près de moi s'asseye, et voyant mon visage
Se baigner de mes pleurs et tomber sur mon sein,
Me dise: «*Qu'as-tu donc?*» et me presse la main.

(大意。——親もなく、友もなく、また同市民もなく、地上に忘れられて、すべての身内から遠く、この未開の島に打上げられたぼくは、しば／＼なつかしいフランスの名をよぶ。暗い折廻に、ただひとり、ぼくは運命をなげき、時をかぞえ、死をのぞむ。誰ひとりぼくに声をかけて励ましてくれる友もない。ぼくのそばに腰かけて、ぼくの顔が涙にぬれ、胸元におちるのを見て、*「一体どうしたのか」*とぼくの手を握ってくれる友もない。*)

* アンリ・ド・ラツシユはこの詩を一七八七年十二月作とし、ベック・ド・フウキエルもこれに倣っているが、ポール・デイモフはこれを一七八八年から八九年の冬の作とし、ジェラル・ワルテル氏も同意している。いづれにしてもこれはロンドン滞在の比較的初期の作と思われる。

しかも、この流謫の生活は単に孤独と悲哀のそれではなかつた。

さらにもつと悪いもの——屈辱を伴つていたのだ。シェニエは元來独立自主の性格であつたが、それがここではひどく傷つけられた。フランス大使館の人々は別としても、かれの接する社会は、開放的で気軽なフランスの社会でなく、閉鎖的で氣むづかしいイギリスの「紳士社会」であつた。シェニエはそうした社会で「サン・タンドレ士爵」*le chevalier de Saint-André*と呼ばれてゐたといわれるが、実際には外国大使の一使用人であつてみれば、かえつて偽装した軽蔑や傲慢にぶつからねばならなかつたであらう。われ／＼はこうしたシェニエのやり場のない苦悶のさまをつぎの戯文にみることができる。これは「一七八九年四月三日、金曜日、夜七時に」ロンドンのある居酒屋で走り書かれたものだ。

「まづい食事をした。その上ここではひどく退屈だし、どこかのクラブへ顔を出す時を待つにもゆくところがないので、ぼくは貰つた紙片に書きなぐつて、知らぬまに一時間半をすごすしよう。何を書こうというのか、ぼくにも全然わからない。そんなことはどうでもよいのだ。これがどんなにバカげた、つまらぬものであらうと、(といつても、ぼくのそばで食事している二人のイギリス人の会話ほどそうではないが。かれらは時々ヘタなフランス語を交えて、ぼくにぼくの国の言葉を知つていいるというより、むしろ知らないことを見せつけているのだ。) おそらくぼくはまたこの戯文をみる日があるだらう。そしてここで独りぼつちでぼくに食事をさせた悲しい境遇を想い出して、愉快を感じずにいられないだらう。(というのは過去を想い出すこ

とは愉快なものだ)。

幸福でない人々は孤独を愛し、孤独をもとめる。だが、かれらにとつて孤独は大きな愉樂であるよりもずつと大きな苦痛なのだ。この時かれらの悩みの種は、ひとり、何のまじり氣もなく、まぎれもなく、絶えずかれらの脳裡に去來する。かれらはもう百度も涙ながらに思いうかべたことを、また涙ながらに記憶にのぼす。かれらは苦汁を反芻するのだ。かれらは過去と現在の苦しみを苦しみ、未來をさへ苦しむのだ。なぜならすべてのものの中にはつねに多少の希望が交つてゐるのだが、しかし希望は猜疑心をおこさせ、その不安は苦しい状態だからだ。人はどんなことにも慣れる、苦しむことにさえ。——そうだ。君のいう通りだ。それはまつたく真実だ。——もしそれが真実でなければ、ぼくは生きていないだらうし、そういう君もまたおそらく死んでゐるだらう。しかし、この忌むべき習慣は実にいやな原因から來てゐる。苦しみが頭を疲らせ、魂を萎えさせたことから來てゐるのだ。この習慣は全体の衰弱にほかならない。精神はもはや個々のものを計量し、これを正しい観点から検討して、そして神聖な本原的自然に訴えて、苛酷非道な人間の諸制度を正面から攻撃するだけの力をもたず、魂はもはやあわれな人間どもの間に打建てられた人工的不平等にたいして憤激したり、不正を考えただけでも反抗したり、またおのれを押しつづす重圧をはね返すだけの力をもたないのだ。魂は品位をおとし、下落し、平伏してそして死者が墓石を堪えることに慣れるように、苦しむこ

とに慣れるのだ。というのは死者はそれを持ちあげることができないからだ。これがすなわちどんなことにも慣れる、苦しむことにさえ慣れるということだ。神よ、ぼくの友人達をこの悲しい習慣から守りたまえ！ 小さな悩みは人をやさしくし、大きな悩みは人を頑固な世間嫌いにする。前者は社交、慰安、友人の会話をとめ、後者はこうしたものは一切さける。なぜなら大きな悩みをもつ人はこうしたものがすべてかれらを慰めるに何の力もないことを知っており、また、とくに自分一個のために、いたづらに他人を悲しませることを不当と考えるからだ。またおそらくかれらは友情そのものも、そのやさしい言葉も、その愛撫の眼差も握手も、すべての傷手をいやす力のないことを友人にみせる恥しさを感じるのであろう。けれども、ぼくの友人に逢うことやかれらの心遣いは、いつもぼくには益になった。たとえぼくを完全に癒やしてくれなかつたとしても。

しかしここではぼくは独りぼつちで、ぼく自身に委ねられ、ぼくの重い運命に服している。そして頼りになる人は誰もいないのだ。独立とは何とよきものか！ 自分の老父母や全家族に役立ちたい願いのために、自分の独立と清貧をすてることを余儀なくされないものこそ幸いなるかなだ！ いつかぼくも金持になろう！ そうしたら、ぼくの苦勞、ぼくの心痛、ぼくの不快の成果によつて、どうかぼくの近親がこの同じ不快、同じ心痛、同じ苦勞をまぬがれてくれるように！ どうかぼくのために屈辱からのがれてくれるように！ そうだ、たしかに屈辱だ。ぼくはぼくの名

譽が傷つけられるようなものは何も起つていないことをよく知っている。またそうしたものが決して起らないだろうということもよく知っている。なぜなら、その保証はぼく一個にかかつているからだ。しかし、ぞんざいに取扱われ、人の上位にあると思つてゐる社会で受容られないということは、情けないことだ。輕蔑でなくとも、少くとも高慢な儀礼をうけることは堪えがたいことだ。またつらいのは感じること——何を？ 誰かの下にあるということとか？——いや、しかし君が自分の下位にあると信じている誰かがいるのだ。あの大官連は、もつともいい連中では、あらゆる機会に、かれら自身について抱えている思いあがつた考えをうまく見せつけるのだ！ かれらはしばしば、財産の優位がかれらの価値の優位に起因すると思ひこんでいるようだ！ かれらの親切もずいぶん冷酷なものだ！ かれらは自分の感覚とかれらの同類の感覚には多大の価値をみとめているが、かれらのいわゆる部下の感覚などは、てんで問題にしないのだ！ 何かちよつとした心配事が、かれらの同輩とよぶ誰かの虚栄心にふれただけでも、かれらはあれほど熱し、昂奮し、同情するのだ！ はげしい痛みが、かれらの部下とよぶものの胸を引裂いても、かれらはまるで血も涙もないのだ！ かれらは平然と、うわの空で、気の毒がる！ まるで蟻が死ぬのを見ても何の苦痛も感じない子供のようだ。蟻は自分達の種族とは何の関係もないからだ。

ぼくはあの上流社会で、しばしば名前をたづねてからで

ないと感動しない、こうした特異な感受性の実例をみかけが、そのたびに腹の中で笑いを禁じえないのだ。とくに婦人連はこの点驚嘆すべきものだ。舞踏会で出会った王侯とか、親友である（というのは二度ほど食事を共にしたからだが）大官とかが、病氣になつたり、地位や馬を失つて心を傷めていると、たちまちかの女達は大きに同情する！ 大まじめにその不幸をなげく！ かの女達は悲愴な叫びをあげ、まづたく絶望の極だと思つてゐる。なぜなら婦人連は、ほとんどすべて率直な、真実な、また素朴な感受性を欠いているので、こうした猿真似や空々しい身振りが、実際、絶望の名の意味するものだと思ひこんでゐるのだ。

さあ、一時間半すごした。出かけよう。もう何を書いたかわからない。しかしこれは唯ぼく一人のために書いたのだ。気取りもなければ、綾もない。これはぼくだけが見るのだ。そしてきつとぼくはいつかこのぼくの悲しい青春の断章を読み返して、何かの喜びを感じるだろう。いつか、ぼくがあらゆる読者のために書いたものを、すべての読者が読んで同じ喜びを感じてくれるように！^{*}

* この文章には左の通り執筆の場所と日付が記されてゐる。

London, Covent-Garden, Hood's Tavern.

Vendredi, 3 avril 1789, à 7 heures du soir.

見られる通り、この「悲しい青春の断章」には、誇り高い知的

な青年の苦悶が生々しく描かれてゐる。シェニエはこうした堪えがたい状態にあつても、精神と魂の衰弱による「忌むしい習慣」に抵抗している。そして能動的存在としての人間の名誉を保持しようとするが、それはただ自分一個のためではなく、友人達にもこの「悲しい習慣」から免れてくれるよう願つてゐる。またシェニエは自分の犠牲において近親者を同じ苦勞や屈辱から救おうと欲しているが、こうしたことはすべて「気取りもなければ、綾もない」だけに、一層よくかれの人柄を物語つてゐると思われる。けれども、中にはルソーの宣言やアルセストの台詞を思わせる文句があり、また最後に青年詩人らしい自負と希望で結んでゐるのは、むしろほお笑ましいといえよう。

ところで、この文章でみると、シェニエと大使との間に何かの違和の生じたことも疑われる。しかしこれについてはシェニエが同じころ（一七八九年四月二十一日）父に送つた手紙の文面以上を知るべきがない。

「大使とぼくとの間には何の冷却もありません。大使がぼくに述べた意見は非難よりも尊重の印でした。ぼくは口調からそう判断したのです。大使がぼくに示す愛着はすこしも減じるようなものとは思われません。なぜならそれは「一時的な懐柔というより、ぼくの性格を知つた上のことなのですから。」

しかしこうした表現も老父をいたわるシェニエの優しい心遣い

であつたかも知れない。そういえば、父への手紙では「苛酷非道な人間の諸制度」とか「所望の住家、墓場」には一切ふれていない。――

それはともかく、シェニエはついでにこう書いてゐる。

「ぼくの独立の犠牲ということですが、これは御承知のうちに実際はらつたのです。この独立の希望は非常につよいものでしたが、いつかぼくの家族のために役立ちたいという念願に譲りました。そしてぼくの犠牲は、独立をあきらめながら、なおその価値を感じたのですから、一層表彰ものです。」

察するに、シェニエはこのころから自分の「独立を犠牲に」して「家族のために役立つ」ことに努めなければならなかつた。それは要するに父への送金であつた。そしてこれは初めシェニエの自発的行為であつたが、のちには父からも要求するようになった。そしてそのためにかれの生活はますます窮屈になり、「悲しい境遇」はさらに悲しいものとなつた。シャトーブリアンが引用した例のエレジーはこのころの作と考えられる*。

O nécessité dure! ô pesant esclavage!

O sort! je dois donc voir, et dans mon plus bel âge,
Flotter mes jours, tissus de désirs et de pleurs,
Dans ce flux et reflux d'espoir et de douleurs!

Souvent, las d'être esclave et de boire la lie
De ce calice amer que l'on nomme la vie,
Las du mépris des sots qui suit la pauvreté,
Je regarde la tombe, asile souhaité;
Je souris à la mort volontaire et prochaine;
Je me prie, en pleurant, d'oser rompre ma chaîne;
Déjà le doux poignard qui percerait mon sein
Se présente à mes yeux et frémit sous ma main,
Et puis mon coeur s'écoute et s'ouvre à la faiblesse;
Mes parents, mes amis, l'avenir, ma jeunesse,
Mes écrits imparfaits; car à ses propres yeux
L'homme sait se cacher d'un voile spécieux.
A quelque noir destin qu'elle soit asservie;
D'une étreinte invincible il embrasse la vie;
Et va chercher bien loin, plutôt que de mourir,
Quelque prétexte ami de vivre et de souffrir.
Il a souffert, il souffre: aveugle d'espérance,
Il se traîne au tombeau de souffrance en souffrance;
Et la mort, de nos maux ce remède si doux,
Lui semble un nouveau mal, le plus cruel de tous.

(大意。――おお、つらい貧乏! 重苦しい奴隷の身! おお、運命! ぼくは美しい青春にありながら、欲望と涙に綴織られたわが日々の、希望と苦しみの波間を漂うのを

見なければならぬのか！

しばしば人生と呼ばれるこの苦杯をなめることに飽いて、また貧困に伴う愚か者どもの輕蔑にも飽いて、ぼくは所望の住家、墓場をみつめる。ぼくはみづから進んで近き死にほお笑みかけ、泣きながら、ぼくの鎖を切ろうと願う。ぼくの胸をつきさす快い刃は、はやぼくの眼に映り、ぼくの手許にふるえている。と、ぼくは心をすまし、氣がくじける。ぼくの親達、友人達、將來、ぼくの青春、ぼくの未完の作品。人間はわれとわが眼に、もつともらしいヴェールで身を隠すものだ。人生がいかに暗いさだめであれ、人間は無性にこれを抱きしめる。そして死ぬよりも、生きるため苦しむための口実をはるか遠くへ求めにゆく。人間は苦しんだ、苦しんでいる。希望に盲いて、苦から苦へ墓まで身をひきずるのだ。そして死、このわれ／＼の苦患の良薬も、また新たな苦痛、なべての苦痛の中でももつとも残酷なものに思われる。)

* シャトープリアンは一八〇二年「キリスト教實體」の「註と解説」の中でこの詩を引用したが、前四行を省いているし、用語にも多少異同がある。またユゴーは一八一九年「ル・コンセルヴァトゥール・リテレール」の初号に同じくこの詩を引用した。

なおこのエレジーは「ルネ」の前駆ともいわれるもので、ファゲはこれを「シャトープリアンやミュツセのも

のと同じく深い、眞摯な、また胸を裂くような調子のエレジー」と云つてゐる。(Faguet, *André Chénier*, p. 76.)

その上、この年の七月十四日祖国フランスには大革命が勃発した。シェニエは七九年代の青年らしく、きわめて樂觀的な熱誠をもつてこの自由の叫びを迎えたのだつたが、所詮、他國にあつてはすべてが不安と焦躁の種でしかなかった。かれはこの年の十一月父にこういう手紙を書いている。(これは同十一月四日フランス座で上演された弟ジョゼフの劇「シャルル九世」の成功を祝うためパリへ帰り、任地に戻つてから書いたものだ。)

「なつかしい父上、ぼくは十九日にこちらへ着きました。旅行は何も變つたことはありませんでしたが、航海は今までない苦しいものでした。ぼくはすぐパリが恋しくなりました。というのは、ここでもわれ／＼の事件についての不安は大きく、またさらに不愉快なのです。この不安はずつと漠然としていますし、また事態がどうなつていくか知るのにずつと時間がかかるのです。その上、わるいニュースは、いつも、イギリス人の悪意によつてばかりか、さらにずつと当地在住のフランス人の大部分によつて拡大され、誇張されています。しかもこれらのフランス人は、祖国にたいするかれらの忌むべき敵意がかれらを見下げはてた、滑稽なものにしていることがわからないのです。昨日

も、特別便でついた十九日あるいは二十日付の書信によれば、ちようどその日パリ全市が混乱におちいつたとか、四方八方に警鐘が鳴りひびいたとか、知らされました。……ぼくはこの不吉なニュースを疑つて、あらゆる手をつくしています。はつきり知りたくていら／＼しているのです。

というのは、われ／＼にこの擾乱を知らせた連中は、何も詳しいことをいわないし、その原因をちつとも明らかにしないで、結局かれらが惹起した不安に明確な対象をあたえるようなことは何もつけ加えないのです。こちらにはあなたにお知らせするようなニュースは何もありません。フランスの事件は、フランスにおけると同様、ここでももつぱらの話題となつていきます。なつかしい父上、さよなら。母上にどうぞよろしく。兄弟達を心から抱擁します。ぼくの敬意ある愛情を永遠に信じて下さい。(一七八九年十一月二十四日。ロンドンにて、シエニエ・ド・サン・タンドレ。)

こうして革命の成行、祖国の運命も気がかりであつたが、同時に騒乱の中にある家族のことも心配であつた。とりわけ、ささやかな年金で一家を支えていた老父の身の上が案じられてならなかつた。革命が起つた以上、年金の問題もむづかしくなり、父の財政は苦しくなるばかりであつた。親思いの「サン・タンドレ」——そして思想的にも性格的にも一致して、どの兄弟よりも父に愛され、また父を愛していた「サン・タンドレ」は、この老父へ実に真情あふれる手紙を書き送っている。

「なつかしい父上、フランスからこちらへ届くニュースは、半ばよく、半ばわるいのですが、ぼくはあなたのことが心配になりました。ぼくはあなたの年金の問題がどうなつているか、またすべての年金の事由が検討されることになるでしょうが、そのとき国民議會に提出すべきものを何かもう用意されたかどうか、知りたいのです。この事項についてはずいぶん乱暴とも思われる決定がなされましたね。どうか事務がうまく処理されるよう祈つています。これも結局財務省によつて行われるほかないのですが、この方がまたのよいことです。無氣力がひきおこす恥辱は別としても、パリでは何という恐しい動乱がその結果とならないでしょうか！ 地方はそれほど影響を感じないでしょうから。しかし当分パリが地獄となることは確かです。ぼくはそれを考えると慄然とせざるをえません。

パリでは天候が大へんよろしいそうで、結構なことです。それではあなたも良好な健康状態をつづけられると思います。いつもそうなのですから。……(一七九〇年一月十九日、ロンドンにて。)

またそれから十日後に、

「なつかしい父上、ぼくにお書き下さつた先日のお手紙、心うれしくまた悲しく受取りました。あなたの御健康よろしいようで、これは嬉しく存じます。しかしその他はぼくを悲しませました。あなたは難儀しておられるようですし、

ぼく自身も困難な状態にあつて、このところ思うようにお助けすることができないのです。あなたはぼくに不自由させたくないといつておられますが、ぼくとしては、自分が不自由しても、お助けすることができるようなら、決して不自由とは思いません。しかしぼくは目下ほとんどまつたく文無しなのです。去年はどうしても幾らか借金をしなければなりません。それで、ぼくはぼく自身にたいしても、またぼくに保証人になつてくれた友人達にたいしても、初めの借金を返さない前に、また新しい借金をしてはならない義務があるのです。あなたは、ぼくにお送り下さつた財産目録の中で、ぼくが時々さしあげた補助をあなたの負債の中に記入しておられます。これは計算の正確を期するためには大へん結構ですが、しかしそれ以外にはこんなものは一切あなたの負債の中に数えられてはなりません。いつかお楽になられたら、返しても戴きましようが、そうでなければ、これはぼくからお受取りになつた贈物ということに致しましょう。ぼくの意見としては、紳士は自分の友人から贈物を受取つてもよろしいが、その友人が自分の息子である場合には、このことは一層真実だと思ひます。あなたは御自分のわづかな収入の管理を子供達にまかせたいと提案しておられますが、ぼくは可能なあらゆる観点からこれには賛成いたしません。どうしてまたあなたはそんな考えを起されたのでしょう。あなたの財政がそれほどわるい状態になつたのも、それが長年あなたの子供達のために、またかれらよりもずっと子供の資格に値する人々のために

処分された故だということを、あなたはお忘れになつたのでしょうか。ぼくは兄弟のうち誰もそんな考えをとりあげるとは思いませんが、しかしもし誰かそれを早速承知しようなどというものがあれば、ぼくは断然反対だと率直に宣言します。この管理を手中におさめるべき人は、ただあなただけだということは自明の理なのです。

ぼくは、今年あなたがぼくの方から現金百ルイをお入用なのかどうかよく分りませんでした。もしそうだととしても、残念ながら、ぼくにはどうもそう考えられないのです。しかしいづれあなたがもつと少い額をお入用ならば、ぼくは友人達に手紙を書いてみましょう。ぼくはちつとも金をもつていないのです。今は誰ももつていないのです。しかしわれ／＼の祖国もついに苦しい諸事情の瀬戸を切抜けるだらうと思ひます。そうすれば、ぼくの友人達も、金があれば、いつもぼくの必要な時にしてくれたように、借すことを拒まないでしょうし、またぼくもかれらに頼んでみましよう。ぼくはこれまで人から援助されるに値するよう、従つてそれを依頼するときに眼を伏せなくともよいように生きてきましたし、また今後ますますと生きるつもりです。

なつかしい父上、さよなら。心からあなたを抱擁します。そして財産のないためにぼくの陥つてゐる困難の中でもつとも苦しいものは、あなたの御要求と御希望に応じられないことだということを、どうか信じて下さい。(一七九〇年

一月二十九日、ロンドンにて、シェニエ・ド・サン・タン
ドン。』

* シェニエが父にあてた手紙は十四通残っているが、そのうちロンドンから発送したものは文中に引用した四通と、他に一七九〇年三月五日付と同十九日付の二通がある。なお父がシェニエに送った手紙は一切不明である。

こうして愛すべき「サン・タン Dre」は、老父のため、一家のために苦しい中から援助を惜しまなかった。けれども、祖国のきびしい現実にはシェニエ家の人々の間にある種の不和を余儀なくした。長兄コンスタンタン (Constantin) はこの大変動にまるで無関心であり、次兄ソーヴール (Sauveur) は何を考えているかわからず、母とジョゼフは「愛国者」を気取り完全にデマゴグとなっていた。そして自分と同じく「秩序と法の友」であつた父は、その中でひとり苦しんでいたのだ。また一方、革命の不吉な進展とともに、アンドレ・シェニエはようやく憂国の熱情を抑えかねた。父もいうように「現下の情勢においてよき市民を鼓舞する唯一の自尊心は、公事に奉仕すること」であつたし、もと／＼この古代的詩人は、また古代的市民思想にふかく浸透されていたのだ。シェニエはいつまでも「悲しい境遇」にあつて不安と焦燥に身をまかせてもいられなかつたのであろう。かれはこの頃からしばしば休暇をとつてバリへ歸つた。そして一八九〇年五月からは事実上バリにあつて、父を慰め、友人達との交際を回復し、精神の平衡も取戻したのであつたが、かれはまもなく市民としての義務

の遂行にわれを忘れるようになった。そうして同年八月から革命ジャーナリズムに身を投じ、「完全に断頭台に値する」²⁾ほどの勇氣をもつて、時の暴虐と闘うのであるが、あくまで謙虚なシェニエとしては、革命中は「何も、おかげで絶対に何もしなかつた」というであらう。

1) *Idées pour un cahier du tiers état de la ville de Paris* (1789).

2) Faguet, *Dix-huitième siècle*, André Chénier.

3) *Lettre à M. Brodelet*, Paris, ce 28 octobre 1792.

*

ところで、アンドレ・シェニエはイギリスやイギリス文学についてどう考えていたであらうか。またこのロンドン滞在はシェニエの文学、思想とどういう関係をもっているであらうか。――

シェニエがロンドンに赴任した当初、ここでの生活にかなり満足した状態にあつたことは前にのべた。けれども、また前述の通り、かれはまもなく「悲しい境遇」におちたのであつた。そしてこれにはもちろん孤独、貧困、屈辱ということもあつたが、イギリス人の性格そのものもかなり大きな原因であつたと思われる。「二つの美しい祖国」――ギリシャとフランスの子シェニエは、「陰鬱な北方」を愛することができなかつた。特にこの「未開の島」の陰性な、自尊心のつよい住人、またこの「金を払うものにはまるで売物の国民」には、どうにも好感がもてなかつたらしい。

かれはむしろ悪意をもつてイギリス人を観察し、これに不当なまでに批判的な態度を示している。

Laissons là les Anglais....

Laissons là leur jeunesse... mélancolique
Au sortir du gymnase ignorante et rustique,
De contrée en contrée aller au monde entier
Offrir sa joie ignoble et son faste grossier ;
Promener son ennui, ses travers, ses caprices,
A ses vices partout ajouter d'autres vices,
Et présenter au ris du public indulgent
Son insolent orgueil fondé sur quelque argent.

(大意。——イギリス人なんか放つておこう……陰鬱な……この青年達は、無知な田舎者で学校を出ると、國から國へ世界中に、かれらの下劣な快樂や野卑な贅沢を見せにゆき、かれらの倦怠、惡癖、氣まぐれを持ちあるき、到るところで惡德に惡德をかさね、そして若干の金にもとづいた傲慢不尊を世の人々の嗤いに供するがよい。)

またシェニエはこうした流謫者のつねとして(たとえばヴォルテールのように)、その地の文学を研究した。けれども、かれは文学についてもまた「陰鬱な北方」を愛することができなかった。特にこの島国の文学者達のあり方には甚だしく不満であつた。

Les poètes anglais, trop fiers pour être esclaves,
Ont même du bon sens rejeté les entraves.
Dans leur ton uniforme, en leur vaine splendeur,
Haletant pour atteindre une fausse grandeur,
Tristes comme leur ciel toujours ceint de nuages ;
Enfés comme la mer qui blanchit leurs rivages
Et sombres et pesants comme l'air nébuleux
Que leur île farouche épaissit autour d'eux ;
D'un génie étranger détracteurs ridicules
Et deux-mêmes et deux seuls admirateurs crédules,
...

(大意。——イギリスの詩人達は、奴隸になるにはあまりに高慢で、良識の足桎を拒絶した。かれらはみんな一樣に、空しい光輝の中で、偽りの偉大に達しようと思を切らす。かれらはいつも雲におおわれたあの空のように憂鬱で、かれらの岸辺をあらう海のように膨れ、またかれらの未開の島がまわりで濃くする陰鬱な空氣のように暗く、重苦しい。かれらは異國の天才には滑稽な中傷者で、もつぱらかれら自身の輕薄な讚美者だ、……)

したがつて、初め「寛大であつた」シェイクスピアにたいしても批判的となり、この國の人々の礼讃ぶりが氣に入らなかつた。われ／＼はこの期の作と思われる「諸芸術の完成について」の論文の中につぎの文章をみることができる。

「(シェイクスピアについて語った直後に。)²⁾

これはあらゆる文学において不思議なことだ。判断も精神もないこうした作家の群が、ただ一人の作家(シェイク)に執着し、これを可愛がり、祭りあげ、賞揚し、自分達のあらゆる研究、あらゆる言説の中心とし、何でもかでもこの作家に結びつけ、ほかのものには眼もくれず、かれの中にすべてを見、その美点にはむやみに感激し、特にその欠点を謳歌し、もつとも弁解すべきときにも、もつとも賞讃するのだ。そしてこの無慚な狂信者どもは、かれを雲上にはこぶために、たがいに競うてチンブンカンブンわけのわからぬ比喩や途方もない誇張を考え出したり、また何人であろうと意見を異にするものを侮辱し、排斥するために世にも尊大な、予言者ぶつた文句を創り出すのだ。」(第三部第一章)

1) *Sur la perfection des Arts.* (詳しくは *Essai sur les causes et les effets de la perfection et de la décadence des Lettres et des Arts.* — この論文は「つらゝ貧乏が独立を中断した時々」に書かれたもので、この期の作とされている。なおロンドン滞在中の作としては「ほかに」*Invention* や *Hermès* の断片や若干の *Epîtres* などが考えられるが、これらについては今は「ない」。

2) この「シェイクスピアについて語った」文章は不明で

ある。

イギリスの詩人、作家のあり方が實際この通りであつたとしても、シェニエのこうした表現はあきらかに批評の限度を超えている。これはむしろ挑戦といわなければならない。そしてここで特に注目されることは、シェニエの場合、こうした北方の文人、ことにイギリス人にたいする挑戦が、まるで当然のように「ギリシヤ人」との対比によつてなされたことだ。――

「……ギリシヤ人は世界のいかなる国民よりも芸術のために生れついていた。かれらのみが、熱狂の錯乱の中にあつても、つねに自然と真実にしたがつた。……かれらのみが、あらゆる様式をわかつしばく知覚しがたい限界をよく弁えることができた。またあのギラ／＼して眼をくらますだけの、不様な不釣り合いや野蛮な支離滅裂には決して陥らなかつた。……かれらの表現は人間の内部にうまれ、真実で人間的で、あらゆる人々を感動させずにおかない。それはあのシェイクスピアの野蛮な癡癡ではない。どこから引張つてきたかわからない、あの奇怪な文句ではない。またそれは、北方の詩人達にあつて、人の魂を疲らせ、暗くするばかりで、ちつとも感動させたり、惹きつけたりしない、あのバカでつかい思想でもないのだ。……

……北方のこうした詩人の大部分、中でもイギリス人はつねにまたあらゆる機会に、もがき苦しんでいる。かれらの苦しみは狂的な絶望だ。かれらの歎きは吠声だ。かれら

の比喩は自然の中に範をとつていない。かれらの表現は調子はつれだ。また時にはかれらは凡俗の恐怖の対象（*死な*）を冷淡な哲学的な眼でながめようとするが、それがまた行過ぎなのだ。かれらはそれを陰気な、しかめ面の笑いで語り、死の観念を奇妙な親しみのない陽気さでおおうが、これがまた対象そのものよりずつと恐しいのだ。ところがあのギリシヤ人、およびギリシヤ人のように優しく柔軟で生々した魂をもつていたが故に、ギリシヤ人のように書いた人々は、人のこころを喜ばせ、惹きつけ、そしてかれらの巧妙な諧謔によつて、楽しく心を浮き立たせる術を知つてゐるのだ。かれらはバラの冠をつけて死を待ちうけ、正面からこれをあざけるために苦心しない。友達が死んだ。人生は短い。さらば！ 人生は和らかに、それとなく、競技、舞踏、饗宴の中に過ぎねばならない。花々を、新鮮なうちに摘もう……また……あの響しい詩文に表現された愛すべきエビキュレイスムのすべての教訓を。」（同右第二部第四章）

このようにシェニエは古代ギリシヤとの対比によつて北方の文学、ことにイギリスの文学に挑戦したが、このとき「あのギリシヤ人」や「ギリシヤ人のように書いた人々」の側に自分をおいていたことは明らかである。そしてこれはみづから「半ギリシヤ人」と称していたシェニエとしては、別に悪意や虚栄からではなかつたであろうが、それにしても、こうした挑戦の仕方は多少とも不誠実のそしりを免れないだろう。なぜなら、ファゲもいうように

「ギリシヤ人をもつてすれば、誰をも粉碎することができる」*
らだ。

* Faguet, *André Chénier*, p. 99.

けれども、こうしたギリシヤとの対比は、シェニエのいわば常套手段であつて、かれの作品にはほとんど到るところにその例をみることができぬ。たとへば、

Voyez rajeunir d'âge en âge
L'antique et naïve beauté
De ces Muses dont le langage
Est brillant, comme leur visage,
De force et de douceur, de grâce et de fierté.

De ce cortège de la Grèce
Suivez les banquets séducteurs;
Mais fuyez la pesante ivresse
De ce faux et bruyant Permesse
Que du Nord nébuleux boivent les durs chanteurs.

（大意。——見よ、あのミューズの單純な古代美は時代とともに若返る。ミューズの言葉は、その顔のように、力と優しさ、溫雅と誇りに輝いている。

このギリシヤの行列の快い饗宴に随いたまえ。だが、あの

陰鬱な北方の頑固な歌い手達の飲む、騒々しいベルメスの重苦しい酩酊を避けたまえ。」

ところでわれ／＼にとつて、こうした対比の仕方ほどシェニエの本質をよく物語るものはない。かれは南方、輝く太陽の子であつた。そしてあくまでギリシャの芸術理想に愛着し、「陰鬱な北方」の「不様な不釣衡」や「重苦しい酩酊」を嫌悪した。——そういえば、シェニエはストラスブールに駐屯していたときにも、師友ル・ブラン (Le Brun) にあてた書簡詩のはじめに「ミューズよ、ラインとその破壊的な波は唸るにまかせたまえ……」と歌つている。また逆に南方へ旅行したときには、ある断片のノートに「さあ、イタリーへ、ギリシヤへきた。おお、芸術の母、徳に幸いなる地」と記している。——したがつて、こうしたシェニエからみれば、結局、

「北方の国々は非常にすばらしい天才をもつたけれども、ミューズの女神達のかよい足は、某々の峯を歩くのに慣れることはむづかしい。」

と思われた。またかれは「ポエジーは英語をおそれる」ともいつているが、これらの言葉は、シェニエのイギリス文学理解の限界を示しているといえるであらう。(といつても、われ／＼はこの詩人の想像力が北方的なものとの接触によつて何らかの仕方で刺激されたことを無視するものではない。またシェニエ自身も、ギリシヤのほか、トスカナやローマや「イギリス人の未開の猛々し

いミューズ」の提供したものを、かれの詩文の中に導入したことを認めている。しかしこうしたことはすべて、いわゆる文学的影響としては、きわめて消極的な意味しかもつていないと考えられる。)

要するに、右の諸事情から推察すれば、文学に関するかぎり、シェニエとイギリスとの間には、少くとも積極的な意味における影響関係はなかつたといえる。そしてこのことは実際かれの作品の中に確認されるであらう。³⁾

1) この旅行ではギリシヤ、ビザンスまで行くつもりであつたが、病氣のためにナポリから引返した。

2) Cf. *Épître sur des ouvrages*.

3) シェニエが実際イギリス文学をどの程度研究したかについてはほとんどまったくわからない。ただかれの遺した諸断片の中に、かなり興味をもつたらしいシェイクスピアとポープのほかに、「太陽のように幾つかの黒点をもつ、高莊な人……ミルトン」や、スペンサー、ヤング、ゲイ、トムスン、グレイなどの名が散見される位である。(哲学者は別。) またこの場合、かれの英語の理解力のきわめて不十分であつたことも考慮に入れなければならない。

なお、ここでスタール夫人の例の定義を想いおこすならば、シェニエは明らかにクラシックでロマンチックではないといえよう。

*

けれども、政治思想、社会道德の観点からは、事情は多少異つていゝと思はれる。シェニエは、前述のように、ロンドン滞在から動乱の祖国へかえり、そしてやみがたい市民的感情から政治的闘技場へ身を投じたのであつたが、このことは必然的にかれの政治的立場や道德意識を明確にする結果となつた。――

シェニエの政治行動は、疑いもなく、その動機と方法において多分に古代的性格をおびていた。けれども、實際問題としてかれの描いていた政治形態は、また多分にこの政治的先進国――イギリスに負うていたことは明らかである。われ／＼はその証左を、かれがもつとも苛烈な変転の中でもつた一線にみる事ができる。シェニエは国民議會、人權宣言、立憲王制の線をこの革命運動の限界とし、これ以前のを反動的旧勢力、これを突破するものを自由の敵、祖国の敵と考へていたのだ。――たとえば、かれの政治活動の第一弾「フランス人民に告ぐ」において、シェニエはこういつてゐる。

「國民議會こそ目下全面的に活動している唯一の權力なのだ。これのみが國民の名において他の諸權力を動かすことができるのだ。古い權力はすべて破壊された。あるものはその存在が自由憲法の制定に反したが故に、また他のものは前者の従屬物にすぎなかつたが故に。すべて物事の抗し

がたい必然によつてだ。だから國民議會はわれ／＼を支え、われ／＼を難破から救いうる最後の鎧である。」

* *Avis au peuple français sur ses véritables ennemis* (1790)

またシェニエにとつて何よりも我慢のならなかつたのは、この祖国の重大危機に、自由と正義の名において人心を攪乱する口舌の徒輩であつた。かれは敢然とこうした「ガツ／＼の攪乱者」の群に挑戦し、これを眞のフランス人民の「公敵」として弾劾した。そして他方、人民大衆にたいしては、しきりに「公德心」*Esprit public*の覺醒をうながし、こうした「狡猾な極悪人の手におちる」ことをふかく戒めたのであつたが、その際かれは「自由國家におけるよき公德心」を規定してこういつてゐる。

「それはある種の一般的な理性、ある種の実際的な、いわば習慣的な英智であつて、すべての市民の間にほとんど平等に配分され、そしてつねにあらゆる公的制度と一致し、均衡を保つてゐるものではないか。そしてこれによつて各市民は自己に屬するもの、したがつて他人に屬するものをよく弁え、また社会全体に支払うべきものをよく心得、全力をあげてこれに協力するのだ。また各市民はこれによつて他者の中に自己を敬い、他者の權利の中に自己の權利を尊重し、できるだけ自己の主張を通して、決して他と諍わぬのだ。……そして、社会がながく存続して、こうし

たものが全員の中に生来的な習慣となり、一種の信仰、ほとんども迷信ともいふべきものになつた時には、それこそ一國は持ちうる最良の公徳心をもつてゐるのだ。」(「フランス人民に告ぐ」)

この文言をみれば、シェニエがこれを書いたとき「イギリス」を念頭においていたことは容易に察せられる。おそらくかれの説く「エスプリ・ビュブリック」とは、この国の「パブリック・マインド」であろう。そのほかシェニエの「政治的散文」といわれる革命期の文章をみれば、この青年の鋭い理知主義がイギリス的な現実感覚によつて緩和された跡をみとめることができる。「秩序と法の友」シェニエは、すでに、この隣国にあつて自由の原理の実践のむつかしさを学んでいたのであつた。

要するに、政治思想、社会道徳などの観点からは、シェニエとイギリスとの間にかなり深い関係の存在したことを認めなければならぬ。この点、シェニエもまた、——このすぐれて古代的な詩人、そしてかなり自尊心のつよい知識人もまた、モンテスキューやヴォルテールのように、あの「未開の島」で多少とも皮肉な経験をしたのである。

*

以上われ／＼は乏しい資料によつて、検討の範囲を「ロンドン滞在」に限定し、「アンドレ・シェニエとイギリス」の関係をみてきたが、これはもとより匆忙の中になされた一瞥にすぎない。

ことにシェニエの政治社会思想については、さらに多くの敷衍の余地が残されている。またこの主題にしても、これをもつと一般的な観点から考察することも可能であろう。けれども、そうしたところで、詩人アンドレ・シェニエの研究としてはおそらく大した意味はないと思われる。(完)

附記

本題に関する研究としては Legros, André Chemier *en Angleterre (The modern Language Rev., 1924)* があるが、これも閲読の機会がなう。